

## 第10回佛教図書館協会研修会

「日本仏教近代化と学祖井上円了先生の  
東洋図書館構想—挫折とその超克—」〈講演〉

東洋大学文学部インド哲学科教授 川崎 信 定

御紹介いただきました文学部インド哲学科の川崎信定です。普段は、仏教学(大乘仏教の文献購読・チベット語)インドの思想研究を担当しております。それではしばらくお時間を頂戴して、「日本仏教近代化と学祖井上円了先生の東洋図書館構想—挫折とその超克—」と題して、それにちなんだお話しをさせていただきます。

東洋大学の創始者井上円了先生が哲学館を開設されたのは、ご存じの通り明治20(1887)9月16日湯島の白梅にほど近い東大竜岡門前の(臨濟宗妙心寺派)麟祥院を仮の校舎にしました。その後、3年を経てここからほど近い同じ文京区(当時の本郷区)の蓬萊町(今の郁文館中学校がある場所で眞浄寺(寺田福寿)さんの地続きです)、そこに哲学館校舎ができてそこで授業が開講されていましたが、明治29年12月13日に火災で焼失してしまいます。そこで現在の東洋大学の白山キャンパス、すなわちこの場所に新校舎を建設します。この地は、当時小石川区原町と呼ばれ、火事による被災の一年前には既に円了先生が東洋大学科校舎および東洋図書館建設用地として敷地購入済でした。この土地、はじめは凡そ三千四百坪とのこと。円了先生の三大恩人のひとり、勝海舟の娘・逸子さんが嫁いでいた目賀田家が隣り・隣地となって

いるということで、その口利きで購入話が出て、円了先生御自身も数回足をこの地に運び検分されています。その昔、溪声ヶ窪けいせい がくぼと言って付近一帯が茶畑であって、きわめて閑静であり高台で湿気が少ない、勉強に好適であるということで購入されていました。その頃はまったく閑静を超えて寂寂寥寥せきせきりょうりょうたるもので、学習院の先生が牛を飼って牛乳を搾っていたそうです。

火災の直後に、円了先生は、明治29年12月25日付で「哲学館類焼ニ付キ天下ノ志士じんじん仁人ニ訴フ」という文書を発表しております。この中で、長年の哲学館の目的だった東洋大学設立の目途が漸く立ち、その端緒として専修科が開かれようという矢先である。(注釈を加えますと、井上先生の東洋大学は日本大学と呼んでいた時期もありました。実際には当時の専門学校令に則って設立された専修科学校というか、専門学校・カレッジでした。明治時代の当時に設立認可された私立の24校のうちで哲学館は17番目になります。国立は東京帝国大学一校だけ、しかも円了先生が入学した当時はほとんどがお雇い外国人教師が主体で授業も英語・ドイツ語でなされたといえます。この辺のところはお手許の『井上円了の教育理念』29～50ページをご覧ください。)さて、この大切な時に火災によって校舎のみならず、書籍までも尽く焼失

してしまつた。まことに残念である。が、これでめげていても何にもならない。「不肖円了奮然トシテ起チ銳意励精飽マテ其ノ素志貫徹セン」と決意を固めて翌年の明治30年新年早々から再建運動にかかります。広く寄付をおおぎ、即納五円以上には勝海舟伯の特別揮毫した画仙紙四ツ切り一枚を呈するというおまけ付きの運動で、この年すなわち明治30年7月には落成します。教室は二階建てで70坪、土蔵17坪5合(20坪)で書庫になります。これが今日の東洋大学白山校舎と図書館の始まりになり、大正12年9月の関東大震災でもこの土蔵は焼け残って、蔵書を救うことになるのです。

ただ円了先生の図書館構想はもっと早くこれより六年前に約一年間の第一回欧米視察から帰国した直後の明治23年1月に発表した「哲学館内ニ古像・古書ヲ蒐集スル旨趣」に見ることができます。プリントしておきました。

これを読みますと、円了先生はヨーロッパに行かれてみると、かの地では東洋学研究が非常にさかんであった。(明治の20年代のことです。)遠くインドや中国から古い図書とか仏像を買ひ求めてきて、博物館や書籍館に収めている。しかも東洋部門だけの特別の一つの建物を造ってあって、夥しい数の古書とか彫像を陳列して学問考究の参考に供している。日本の書籍とか什器もまた数多く集められているという事実を目の当たりにしてきた。これに比べて我が国はどうであろうか。たしかに書籍館とか博物館は設立されている。とは言え、古きを学問として考証し、考究するために特別これらのものを保存するという計画は聞いていない。これでは将来の学問研究のためには一大欠点となる。「西洋にて東洋学を研究することかくのごとく盛んなるに、日本は自国の諸学を捨てて、ひとり西

洋学を用うるはなはだ怪しまざるべからず。〔『欧米各国政教日記』〕哲学館は、特に東洋の諸学問の考究とその振興を目的としているのだから、これらの書籍や物品の蒐集はもっとも必要なことである。何としても今回哲学館内に古書貯蔵室および古像陳列所を設置したい。いや、設置する。この古書貯蔵室には「神儒仏三道及我邦の史学・文学ニ関スル書類」を、また古像陳列所には「神像仏像ノ外ニ神器仏具ソノ他一切古学ノ考証ニ欠ク可ラサル什物」を蒐集したい。この趣旨に賛同して「所蔵ノ書籍・什器若クハ多少ノ資金ヲ喜捨」してほしいと呼びかけたのです。この趣旨の発起人として、円了先生を筆頭に井上哲次郎、寺田福寿、三宅雪嶺、(内田周平、松本愛重、藤島了隠)の連名になっています。この図書館構想をさらに発展させたものが、5年後の明治28年7月(1895)、今から百十年前に、発表された「東洋学振興策并図書館設立案」です。

勿論、図書館に相当するものは日本でも円了先生に遡ってありました。本日の皆さんは、司書の方々ですので、これこそ釈迦に説法なのですが、すでに律令国家に<sup>ずしよりよう</sup>図書寮というお役所ができていて図書の監理をしておりますし、菅原道真の屋敷内の紅梅殿、中世には足利学校や<sup>かねざわ</sup>金沢文庫、そして徳川家光の紅葉山文庫(宮内庁書陵部)と流石に古くからの歴史に事欠きません。こうした文化背景を誇る我が国も近代的な図書館となりますと、明治になってからで、慶應2(1866)年に福沢諭吉が『西洋事情』の中で、「西洋諸国ノ都府ニハ文庫アリ『ビブリオテーキ』ト云フ」と述べて、(パーク)公園(ホスピタル)病院と並んで、その社会的な公の施設の充実と機能に目を見張ったのでした。そして明治5(1873)年に文部省の役人・市川なにがしがイギリスの大英博物館図書部を参考に「書籍院」建設

の建白書を書いております。これによって、まず神田の旧昌平黌の跡地に国による「書籍館」ができます。これが三万冊の蔵書とともに東京書籍館—やがて明治13(1880)年にこれは上野の山に移設されて、最初の国立図書館である東京図書館(通称・上野図書館)(わたくしもここには一回だけ学生時代に入っております)となります。これに比べて井上円了先生の構想は確かに15年ほど時代が下がります。しかし、先生の構想には、いつものことながら綿密さと廣さ、例えばロンドンの本屋さんにご自分で足を運んで検分しカタログを貫う。細かい数字を挙げての具体性・それにお上に頼らない民間ベースでの即戦力・行動力がありました。さらには、まず東洋—アジア—についての眼差し、それも東洋の宗教思想—神道・儒教・仏教を機軸にして、これを歴史・文学にまで展開させてものを考え、そこから発信するという基本姿勢がありました。

円了先生の図書館第一次提案と第二次提案との間には明治27(1894)年から28(1895)年にかけての日清戦争、つまり我が国と中国の戦争があり、日本が勝利しています。その当時の社会状況が反映されていて、日本はこれから本当の意味での東洋の覇者として立つためには東洋に関する学問の主導権、「東洋学の全権」を握らなければならない。そのため東洋学振興策として、学校の設置と図書館の開設が必須であると説いております。自分は、九年前に哲学館を設立して、これで東洋に固有の諸々の学問を併せて修得する道は開いた。円了先生は熱弁を振ります。「しかし、学校のみにて図書館(ここでは書籍館とか書籍院ではなくて、もう今と同じ図書館のことばかりが使われています)なきときは、兵士ありて武器なく、鉄砲ありて火薬なきか如く、学生たるもの研磨の功績を挙ぐるに甚

だ難ければ、学校・図書館此二者相待ちて始て東洋学の振興を見るべしと思ひます。是れに於て余は哲学館附属として図書館を開設することを天下に表白致します。」と述べて、以下に西洋では図書館とはどうなっているのか、東洋学は何故流行しているのかの分析を進めています。

円了先生が理解しているところでは、そもそも図書館とは、西暦紀元前540年にアテネでできたものが濫觴—ことの始まりとされます。続いて西暦紀元前284年にはアレキサンドリアにできたのが二番目です。これらは王様が作ったものですが、プライベート・私立の図書館は、アリストテレスが紀元前334年に作ったものが最初で、これが167年後にローマに移し建て替えされる。以後近世にいたって各国に続々と設立されて、その結果大いに学問普及の助けとなった。現在の世界の三大図書館というと、仏英独の三国にあり、フランスのパリ図書館は世界第一でその蔵書250万冊。次はロンドンにあって、蔵書は印刷本だけでも150万冊。年々3万冊ずつ増加していて、利用者は毎日平均6百人、読まれる書籍は毎日平均3千冊。次にベルリンの図書館が蔵書百万冊。このように図書館が盛大である。

東洋学の書籍がどのくらい伝えられているかといえば、ロンドンに七年前に滞在していて、トリビュナルという本屋さんの刊行書目録を調べてみたところ、日本の言語・文学に関するもの18部、支那の言語・文学に関するもの77部、印度の言語・文学に関するもの397部、東洋の宗教(仏教・儒教・回教)に関するもの99部、あった。六年前ベルリンに滞在中に欧米各国で出版された東洋学に関する書籍を調べてみたが、日本の歴史に関するもの53部、日本の文学に関するもの30部、地元の歴史地理宗教に関するもの121部、印

度の史類に関するもの128部、印度の考古に関するもの20部、印度の哲学に関するもの37部、サンスクリット文学に関するもの397部、「パリ」語に関するもの31部、仏教に関する西洋人の評論著作は62部、ありました。ロンドン図書館には日本書籍もあった。パリにはギメー仏教博物館があって、そこには日本とか中国の仏教書籍(仏書)が保存されているのを、実際にこの目で目撃してきた。これほどまでに欧米列強が東洋のことを人物・現仏や書籍を通して研究している。東洋の学問の全権を握り先頭を走るためには、この哲学館を他日、東洋大学に組織する目的を持って、これと平行して東洋図書館を哲学館内に二・三年のうちに設置したい。これからは力をこの事に尽くしたい。今までの学校設立のために三年間に北海道から東京他に全国32県220ヶ所を巡回して816回の演説をして、いただいた寄付金は予約を含めて8,193円4銭9厘であった。今後も続ければ、東洋図書館の設置も精神一到すれば必ず成るに相違ない。友人の中で文庫を設立した人は、既に四つ五つの先例が数えられる。法律関係では高橋一勝氏が死後に寄付金を募って、法学院に高橋文庫を設置した。教育関係では、日高真実氏がこれも没後に師範学校の中に日高文庫を設置した例がある。わたくしは死後の香奠の代わりに未だ死せざる間に多少の喜捨を懇情したい。わたくしに一面識を有するお方は香奠の前払いと思って幾分の寄付を贈与せらんことを懇願致します。第一着手として仏教一切蔵経購入寄付を既に始めている。これは、当時丁度、黄檗山宇治の万福寺から仏教一切経典6,930巻を翻刻刊行しようとして予約を取っているもの、黄檗版・鐵眼版で、この好機を失ってはならない。早速購買して図書館蓄積の端緒を開こうではないか。寄付はお一人20銭。現金即納で。ただ、これと

併せて、この他に書物の現物募集も明治29(1896)年3月から始めております。すなわち、和漢書は都会よりも地方に多く存する。地方にある古書は相当の代価をもって購入することができるので、古書貯蔵家は目録及び価額を通知してほしい。仏書貯蔵の寺院は公衆の便益を計り、相当の代価をもって図書館の購買要求に応せられんことを望む。これまでに収集し、現在所蔵している仏書は、凡そ2万巻にもおよび仏教学研究の階梯となすに足りるが、これを研究者が広く縦覧できる閲覧室がないのは遺憾である。是非とも図書館設立資金に賛助をお願いしたいという内容であります。図書館に寄贈された書籍にはその寄贈者の氏名を記して長く保存されることとし、また「哲学館図書室寄贈書目」一覧が大学機関紙『東洋哲学』にその都度、掲載されます。

こうして、講堂の新築と二階建ての閲覧室を増設する図書館の工事は、当時のお金で一万円で開始され、明治33(1900)年5月に皇太子の御成婚奉祝会(大正天皇になられる方ですが)と合わせて哲学館と京北中学校の生徒一同集合して、図書館開館式が挙行されました。その時の当時の原町の地図と写真があります。(東洋大学百年史の記念写真集からコピーしました)。

でも東洋大学の初の東洋図書館が開館した明治33年(1900)という、オクスフォードから帰国後の南條文雄先生からこの東洋大学で梵語を学習した河口慧海がチベット入国を果たした年ですが、この前後には、義和団事件・北清事変勃発、三陸沖の津波、足尾銅山の鉍毒事件、銀行危機や経済恐慌、治安維持法制定や、労働争議と、世情はなにかと忙しく、努力にも拘わらず、募金成績の方は、当初予算の三分の一に充たなかったようです。そのような中で寄付金募集と協力が繰り返し呼びかけられていました。そして、この

二年後、明治35(1902)12月、第二回目の海外視察旅行中の円了先生を襲ったのが、あの有名な、(そして東洋大学にとっては大変に不幸な)哲学館事件でした。でも、あまり一気に深刻になってはいけません。この辺でお話しの筋を変えて、お釈迦様のお話で一服といたしましょう。

お釈迦さまの時代のことなのですが、インドにアングリマーラという青年がおりました。バラモン教の勉強をするためにお師匠さんの家に内弟子として住み込みで修行にはげんでおりました。

「お茶を入れましたよ。勉強もよいけれどあんまり精根をつめると、からだに毒ですよ。一息いれなさいな。」

一心不乱に本を読んでいるアングリマーラに、部屋のそとから、師匠の奥さんのやさしい声がかかります。

「今すこしのあいだ集中したいのだけれど…」とちょっと残念に思いながらも、住み込みの弟子にこのように親切にしてくださる奥さんのやさしさを無下にすることはできません。机を離れます。

おいしい、こころ尽くしのおやつでした。師匠の先生は離れた村までお説教にでかけていて、お留守です。やさしい奥さんとのお話は、愉快で、つい時間が過ぎるのを忘れるほどでした。

突然にやさしい奥さんの声の調子が変わりました。そして「弟子のおまえのことが好きで好きでたまらず、夜も眠れない」と身体をすりよせるように近づけてきたのでした。アングリマーラはびっくりして、奥さんを突き飛ばすようにして部屋にもどり、あたまをかかえ、耳をふさいでうずくまりました。

夕方暗くなるころに、師匠は遠くの村から帰ってきました。内弟子のアングリマーラに

自分の思いのたけを聞きとどけられずに、かえって恥ずかしい思いをさせられてしまった師匠の奥さんは、自分で自分の衣装を破り、自分で髪の毛を乱し、顔を汚して傷をつけ、泣きながら師匠に訴えるのでした。

「あなたがふだんいつも褒めている弟子のアングリマーラは、ひどい人非人です。

今日あなたが村にお説教にいつている留守のあいだに、わたしに言うこときくと、せまったのです。断わったわたしは、このように傷つけられました。」

奥さんの話をきいて、師匠はびっくり驚きます。将来を楽しみにして可愛がって育てていた弟子のアングリマーラがそんな恩知らずな行為をしたというので、火のような怒りが師匠のところに沸き起こってきました。そして、なんとかして、この忘恩の弟子に厳しい仕返しをしたいと考えるようになっていました。

アングリマーラは大変に利発で真面目で、力も強く若さにあふれた好青年でした。

バラモン教の勉強に一生懸命でしたので、あとほんのわずかで、修行も完了というところまでできていました。力ではかないません。一計を案じた師匠は、冷静を装ってアングリマーラを呼び出します。

「アングリマーラよ、おまえ感心だ。わしの言いつけを守ってよく今日まで修行をした。あと一歩でおまえの修行は完成なのだが一。ひとつだけできていないことがあるので残念だ。しかしこのひとつは大変なことなのだ。滅多なことではできないことなのだ。おまえもここで諦めるがよい。」

修行をあきらめるといわれて、びっくりしたアングリマーラは急いで聞きます。

「お師匠さま、わたくしはどんな辛い修行でもいたします。火の中でも飛び込む覚悟はできています。どうか、そのひとつ残って

---

いる修行を教えてください。是非わたくしに行なえと命令してください。」

それでも、師匠はなかなか教えてくれませんでした。地面にからだを投げ出して泣きながら嘆願し、求めるアングリマーラ青年に、最後になって、師匠がそっと耳打ちするように教えたのは、次のような恐ろしいことでした。

〈千人の人命を奪って、その一人ずつから指ひとつをとって指千本の首飾りを作れ！〉

修行の完成に夢中になっていたアングリマーラ青年は剣をもって街中に飛び出しました。アングリマーラとはインドのことばで「指で作った首飾り(指鬘)」を意味します。そして、手あたり次第に近くの人を剣で切ると、その人の指をとって紐でくくって輪にして自分の首にかけました。

「恐ろしい指鬘外道が現れた。指鬘外道に殺されてしまう。」

人々はこのように叫びながら、逃げまどい、やっとのことで家に帰りつくと、窓や扉を固く閉めて、息をひそめて隠れました。

999人を殺して999本の指を集めたアングリマーラでしたが、あと一人がどうしても見つかりません。あと一本の指を獲ることができません。このころには、アングリマーラの眼も血走って、物凄いい形相になっていました。しかしもう、街の路上にはまったく人の気配がなくなっていました。

たった一人だけ年とった女が歩いてきました。アングリマーラの母親でした。母親はバラモン教の師匠の家に弟子入りした息子からこのごろ便りのないことが心配でたまらなかったのです。

「最近街には指切り魔が出るというけれど、息子は無事だろうか？」

こう考えると、母親は家の中にじっとしていることができなかつたのです。息子に会い

たい一心で、路を急いでいたのです。

血迷ったアングリマーラ青年には、もう母親が判らなくなっていました。

「しめた！千本目の指が採れるぞ。」

母親めがけて剣のやいばを振りあげたのです。この時、人影ひとつが近づいてきて、母親をかばいました。アングリマーラの振りあげた剣は、その人影に触れると、ぼとりと力なく、地面に落ちてしまいました。なおも殺そうとするアングリマーラは、まるで金縛りにあったようにその場で動けなくなりました。

人影はお釈迦さまでした。このとき国王も指切り魔を取り押さえようと、たくさんの武装した軍勢をつれて到着しました。アングリマーラはすっかりおとなしくなって、自分の犯した罪の大きさと恐ろしさに身を震わせています。お釈迦さまは、この青年を自分が引きとって弟子にしたいと国王に申し出て、アングリマーラの命乞いをしたのでした。

許されて仏弟子となったアングリマーラ青年は、それから幾年も夢中で修行に励みました。しばらくたった或るとき、街に托鉢に出ました。街の人々は、指切り魔をおぼえていて、アングリマーラに石を投げ、棒で打ち、鎖で引きずろうとしました。こんな時も仏弟子となったアングリマーラ青年は、じっと堪えました。そして厳しい修行をさらに長い年月のあいだ積んで、やがては立派な往生を遂げたということです。

仏典にでてくる古いお話です。京の五条の橋の上の弁慶と牛若丸のエピソードの基になったものですので、ご存知のかたも多いと思います。

このインドのお釈迦さまのお話は、わたくしたちに人間のもつ弱さ・恐ろしさを教えてください。

わたくしたちは、目先の目標を目指して夢

---

中になっているとき、他のあり方・ほかの人の生き方にまで配慮するゆとりを失ってしまいます。千人を殺し、自分の母親にやいばを振りかざすことまでしかねないのです。

「わたしがこれほど一生懸命にやっているのに、他人はちっとも理解しようとしてくれない」とか、「良いことをしているのだから、すこし大目にみてくれてもよいじゃないか」とか、思い込みがちになります。

しかし、このような時にわたくしたちを動かしているのが、結局はわたくしたちのもつ〈我〉・〈欲〉、わたくしたちの心であることを知らなければなりません。

さて、インドのお釈迦さまが亡くなられてからざっと1700年ほど後に日本では親鸞聖人がこのアングリマーラの千人を殺そうとしたお話しについて述べております。もっとも親鸞聖人自身は御自分がお釈迦さまから二千年後の人間であると自覚していたようです。それは「正像末浄土和讃」の冒頭に

「釈迦如来かくれましまして二千余年になりたまふ

正像の二時はをはりにき 如来の遺弟悲泣せよ」

と述べられていることから判ります。

有名な『歎異抄』は親鸞聖人の言葉を弟子の唯円が記録したものといつてよいか(1289)と考えますが、この歎異抄の蓮如本でいいますと、第十三条に親鸞が弟子の唯円に向かって、おまえはわたしの言うとおりにするかと二度まで聞いたことが記されています。「かならずおおせのとおりにいたします」との唯円の確答を得て、それでは人千人を殺してみよ、そうすれば往生は確定的になるであろう。間違いなく極楽往生できるであろうと教えたのでした。ここまではとてもアングリマーラとバラモンのお師匠さんの話に似ています。しかし、唯円はアングリマーラとは

違って「わたくしには一人の人間ですら殺すことはできません。ましてや千人なんて到底できません」と答えるのでした。

このところを『歎異抄』の原文で読んでみます。(プリント)

「またあるとき、唯円房はわがいふことをは信するかと、おほせのさふらひしあひだ、さんさふらうとまふしさふらひしかば、さらばいはんことたがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つつしんで領状まふしてさふらひしかば、たとへばひと千人ころしてんや、しからは往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしとおほへずさふらうとまふしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがうふまじきとはいふぞと。これにてしるべし、なにごとまころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれどもひとりにてもかなひねべき業縁なきによりて害せざるなり。わがころのよくてころさぬにはあらず、また害せじとおもふとも百人・千人をころすこともあるべし…」

アングリマーラの千人の指あつめの話は「増一阿含経」・「央掘摩羅経」とか「大智度論」を通じて広く古くから日本でも知られています。(プリントにどのような経典にどのような名前アングリマーラのお話が説かれていたかを記しておきました。)熱心に仏教の勉強をしてきた唯円のことですから、この話を知っていたことは間違いないでしょう。とすれば、この親鸞聖人の問いかけには、「お師匠さんはわたくしのことを験しておられるな。これは試験だな。いくら、お師匠さんのことばに従うといたって、そしていくら真剣に往生を求めるからといっても、その前に人としてあるべき道を踏み外してはなにもな

---

らない。わたしは、アングリマーラとは違うんだ。」と考えたでしょう。唯円は案外と自分では上手く答えたつもりであったかもしれませんが。そしてそれが得意顔になって表情に出ていたかもしれません。これに対する親鸞聖人のことばは、厳しいものでした。

「唯円よ、おまえは師匠のことばに忠実に従わないという悪を犯したまでも、人を殺さないという善をなそうとした。それはそれで正しいことだ。

しかし、心が善くて、おまえが殺さないのではないのだ。千人を殺そうとしたアングリマーラの心も、一人を殺せないとしたおまえの心も、おまえたちが心を頼りにしているとかぎりでは同じことなのだ。でも心なんてそんなに頼りになるものじゃないよ。一人の他人も傷つけないかと思っておまえが百人・千人を殺してしまうこともあることを知らなくてはいけない。すべてが宿業、宿縁でそうなるのだ。」

このように述べますと、親鸞聖人が運命決定論・運命論者・宿命論者のように聞こえて、自らの努力・自己責任を放棄しているように思われるかもしれませんが、決してそうではありません。宿縁・宿業といっても、よく俗にいわれるように、原因が遠く自分の手の届かない昔にあって、例えば過去の先祖がなにかをしたのが祟るといった、今の自分と関係のない話しではありません。むしろ、日常茶飯事の一挙止・一投足が「宿業にあらずといふことなしと知るべし」と親鸞聖人が説いているように、宿縁・宿業によって現在のわたくしがわたくしならしめられているのであり、己が己れを構成することになっているのです。それらは今まで、これまでの自分が参加して今の自分を作り上げているものなのです。ですから宿縁も宿業も自分自身のことにはほかならないのです。そうかといって急に

自分でこれらを処理しようとしてもどうにもならない。人間のあり方というか、生き方には、このようなどうしようもなさがある、一不条理さ・算盤勘定の合わないところがあります。親鸞さんはそこまでつっこんで人間を見つめていました。そして、そのどうしようもなさをどのように解決するかと聞かれて、親鸞は「自分に、自分のところに誠実でありたいといっても、その自分・自分のところがあてにならないのだよ。だから、そこまでやったら後はもう自分には頼ってはいけない。ただひたすら祈れ」と教えたのでした。

親鸞聖人からおよそ六百年後の安政5(1858)年、(明治維新の十年前)に新潟県三島郡越路町浦の浄土真宗大谷派の慈光寺で、われわれの東洋大学の創設者・学祖井上円了先生はお生まれになっておられます。ここで漸く本日のテーマに関連して、東洋図書館作りに苦勞なさっておられた東洋大学の創始者井上円了先生に戻ります。

明治35年(1902)円了先生44歳で欧米およびドイツの教育事情視察のため第二回目の外遊をされている間に起こった、いわゆる世に「哲学館事件」として知られる、円了先生のその後長い間にわたっての御苦勞と御心痛の種となった事件についてです。

発端は御存知のように、倫理学科の卒業試験での一学生の書いた答案をめぐっての学科教師(といっても中島徳藏先生はこの事件勃発の数年前には国の文部省修身教科書起草委員会のメンバーでしたから当時を代表する倫理学者で、喩えてみれば、こちらにおいでの小池喜明図書館長みたいな大物)だったのです。文部省の視学官との対応・意見の相異から発しています。そしてこのときの試験問題とは「動機善にして悪なる行為ありや」というものでした。まさにアングリマーラや唯円が問いかけられた問題だったのです。こ

---

れに対する一人の学生の答えは「結果の部分のみをみて、これに善悪の判断を下すべきものに非ず。しかあらずんば自由のために弑逆をなす者も責罰せらるべく、……」と書いていました。つまり、お上(主君)を弑する、殺すという行為は、その結果としては悪なる行為である。しかし、動機が、「自由のため」という善なるものであった場合はどうなるか？動機が斟酌されてしかるべきではないのか。したがって、行為は結果のみでなく、目的と結果という行為全体から見て道徳的判断を下さなければならないという趣旨でした。これは当時、哲学館で倫理学の教科書に使っていたイギリスのバーギンガム大学教授のジョン・ヘンリー・ミュアヘッド(John Henry Muirhead, 1855～1940)のテキスト(The Elements of Ethics, 1892)に基づく解答でした。個人の自我の実現がそのままに自己の善の実現、ひいては公共の善(幸せ)に他ならないとする、当時のイギリスの理想主義政治哲学思想ともいえる流れの中での考えです。ここには、クロムウェルが議会后を盾とした民軍を率いて国王の軍隊と戦いを交え、チャールズ一世を処刑し、共和制を実現した、いわゆるピューリタン革命という歴史的事件を是認し、さらには最大多数の最大幸福・最小苦痛といった、哲学思想としてはプラグマティズム、政治思想としては民本主義さらには近代民主主義(デモクラシー)へと連なる主張が反映されています。

これが文部省から派遣された隈本視学官の目に引っかかりました。「おたくではお上を暗殺するようなテロリズムを是認する教育をしているのですか」というチェックが入ります。そして日本の当時の教育勅語発布(明治23(1890)年)後の国体論(国と宗教の問題)・日清戦争後の日露戦争に突入していく寸前の国家情勢・社会政治情勢の渦に巻き込まれ、

当時の文部省の私立学校政策における一種の見せしめの処罰を哲学館が受けることになり、以後五年間中等学校教員の無試験資格授与の特典が取り消しとなるという不幸な事態にまで発展しました。まさに全国的に「哲学館事件を取り上げない新聞は新聞にあらず」とまでいわれるほどに一年間500件を越す記事が新聞雑誌上で取り上げられるといった、まさに社会的な大問題に発展してしまいました。

詳しく触れる必要はありませんが、円了先生御自身この事件についてはいろいろな思いがあられたことでしょう。しかし、円了先生が偉大なのは、滞在先のイギリスで文部省にも書簡を送る。日本公使館にも確かめ、公使とも再三連絡を取り、ミュアヘッド教授自身とも(面会は実現しませんでした、コンタクトを取り)そして急遽帰国された後、当面の対策に奔走されたことはもちろんですが、基本的には「天災に非ずして人災としてあきらめるよりほかはなし」とされて、いたずらに紛糾させるよりは、むしろこれを機会に積極的に前向きの事業に着手されたことです。

まず第一は哲学館を従来の専門学校から転換させて哲学館大学とする開設認可申請に着手されたことであり、これは翌年10月に実現されています。

第二には中野区和田山の地に哲学堂を明治36年11月23日に建設完成されています。ここには83名の教員免許無試験認可取消学生の氏名を刻んだ記念碑も建立することにされたのです。

そして第三にはいわゆる「南船北馬集」に記されるような、道徳の普及と徹底と日本人の国民性の向上を目指しての社会民間教育事業としての修身協会運動を精力的に開始展開されました。この修身協会運動の総本山がこの哲学堂でありました。また図書について

---

も、明日、哲学堂においでになられて清水先生から御説明があるはずですが、ここに(円了先生が大連でお亡くなりになる二年前の)大正6年に哲学堂図書館が開設され、特に円了先生が私財を投じて購入された和漢書のうち、明治維新以前の古書に限って蔵書21,560冊が収められました。

一方、白山の東洋図書館はどうなったのでしょうか？ 円了先生が大学教育に図書館は不可欠という固い信念のもとに、死んでも香奠は入らないから今のうちに、本代をくださいと有縁の校友や有縁の方々に頼んで廻って明治33年に作り上げた煉瓦作り、二階建ての17坪5合(57.75平米)の東洋図書館書庫は、大正12年の関東大震災にも無事に耐えて残ります。(そして昭和12年10月まで白山の施設として使用されていました。)ただ時代も昭和に入りますと、東洋大学も大学昇格に伴う規準で旧大学令に適合するように、図書館も昭和3年に建て直されます。この時は延べ379坪、他に書庫127坪、10万冊の書物の収容力を有する第二回図書館新築が財団の手で企画建設されました。一番始めの東洋図書館の構想と比べると約十倍の規模です。鉄筋コンクリート製の建材で三階建て、書庫の窓には鉄製の鎧戸が装着されている当時としての最新の設備で完成しました。先の戦争中の東京大空襲の度重なる焼夷弾落下にも、この鎧戸が威力を発揮したことと、当時の岩本末子司書と和田吉人先生が身を挺して護り抜いたことによって、当時の図書は、昭和46年の創立80周年記念図書館の建設になる地下二階・地上四階・書庫1,804平米の図書館、さらには平成8年建設の地下二階・地上十六階建て二階部分までを占有する、すなわち、現在の図書館の中に収められております。また哲学堂の図書館に収納されていた円了先生個人蔵書も昭和50年に東京都中野区から大学

に無償譲与され、現在は白山のこの図書館に移管され、目録も整備されております。つまり、円了先生は、図書に関しても時代の危機を見事乗り越えられて、現在のわれわれにこれらをお手渡しいただいているのです。そして、これら教育と図書と民間道徳普及活動の三事業は別々の事業ではなく、円了先生の教育理念および生き様と深く密接に関わっていました。このことは井上円了センター(エクステンション課)から刊行されている「井上円了の教育理念」および「東洋大学百年史」に詳しく記述されるところであります。

思うに『歎異抄』に伝えられる親鸞聖人の「ひと千人殺してんや」のくだりを熟知されていたであろう円了先生からしてみれば、ミューヘッドの「動機善にして結果悪」の矛盾解決という課題が、西欧流の個人主義主体の理想の延長に社会全体の善がもたらされるであろうという単純な理想論では片づかないことは、先刻お判りになっておられたでしょう。そこで哲学堂の四聖堂に釈迦をはじめとして孔子・ソクラテス・カントの四聖を祀り、その中央にあって「南無絶対無限尊」を祈られたというのは、単に東西哲学の融合総合を図ろうとする、単純なシンクレティズム以上のお考えがあったように思われます。つまり、この時、円了先生のお考えの中には、有限な人間の知恵を総合し、力の限りを尽くした上で、さらにそれらを超えて無限なるものに祈るという、親鸞の阿弥陀仏に対する回向と同じ思いが去来し、そこに万感の思いを込められて「南無絶対無限尊」とお唱えになられたのだと感じるのはわたくしだけでしょうか。

考えてみますと、アングリマーラの話には、千人近くの間人が殺されているのに、根っからの悪人は一人もいないのです。これがこのお話の怖いところなのです。でも、千

---

人近くの人を自分の刀で殺して、その指を自分の首の周りにかけた頃のアングリマーラの形相はもう物凄かったと思います、血だらけになり、返り血を浴び、髪の毛も逆立ち、眼は血走る、心も、もはや自分の母親すらも識別できなくなっていたのです。お釈迦さんの時代にアングリマーラが千人の人を殺す、その指を首飾りとするということは、たしかに悪の実感・おぞましさを感じさせるものであります。そして、そのおぞましさを踏まえたとでの指鬘外道の御説法であり、また親鸞さんの「ひと千人殺してんや」の唯円に対する謎かけだったと思うのです。

ところがどうでしょう。現代においては、同じ重さの事件にアングリマーラあるいは親鸞に問いかげられた唯円ほどには、おぞましさの実感が伴ってきません。核搭載ミサイルの発射ボタンを押すパイロット、あるいは先の地下鉄サリン事件でこうもり傘の柄の先でビニール袋を突いた、学識ある若者たち、(あの時の教祖によるボワの勧めはまさにアングリマーラのお師匠さんと同じですね。)あるいはこれは事件ではなくて事故ですが、ウラン燃料加工施設の臨界事故などなど、現代においては千人の人を殺すに比して比較にならないほどの大規模な不幸がそれだけの実感を伴わずに世の中にもたらされうるという大変に危険な状況がすでに現実化してしまっています。しかもそれが稀代の大悪人によるのではなく、ごく一般的な人—ご近所の誰かさんによっても、またあなた自身によっても、なされうることが言いようもなくこわいこと、危険なのです。悪なり、それを行った、行うことの罪の意識というものはおよそ主体的な事柄です。それだけに悪を行なう、罪ある行為をなすのが実感を伴わないということは現代においては大変な問題です。このような現代にあって、この善悪・罪の意識の問題を、と

くに若い世代に伝えるにはどのようにすべきか？これは大変に難しいことです。

「ぼくはぼくなりになりました。ちゃんと生きていて悪いことなんかしていないもん。それ以上の干渉は余計なお世話だ」と直ぐにいわれてしまいそうです。たしかにそうなのです。でもそこでもう一歩進んで考える必要があります。

アングリマーラのお話には悪人というのは誰一人いなかったのです。つまり悪人がいないのに、たしかに悪がある。そしてたくさんの人たちの不幸が起こってしまうということが現実にも簡単にありうるのです。みんながそれを思いをいたさなくてははいけません。「ぼくはちゃんとしているもん」といった自分のこころの誠実さだけではすまされないのです。

わたくしたちが自分を発信基地に仕立てて物事を考えるとき、兎角、自分にとっての便利さや欲望の満足だけを考えるときには、千本の指の首飾りのために999人まで殺してしまったアングリマーラと同じということになってしまいます。

ではどうすればよいのか。このときにどうするか？人間の持つ弱さと恐ろしさをまず自覚する。その上で自らを戒め反省し、他に対して少しでも思いやり、感謝する。当たり前のことです。でも、これが円了先生が哲学堂において哲学をする楽しさとともに、精一杯の努力を尽くしての先に「祈る」ことの大切さを説かれたポイントともなっていたと考えるのです。最後は坊さんの説法になってしまいました。仏教に関係して、仏教の典籍に関係していることに普段接しているわれわれは、やはり、単なるものとして、これらを扱うことにとすれば慣れ勝ちです。

このような時に、人為を尽くした上での絶対なるもの・無限なるものに手を合わせる意

---

義・「祈ること」の大切さについて、そして円了先生の書籍に対する、そして東洋思想に関する教育と相まったの図書館に関する思い入れを御紹介しました。普段学生には、渋谷から30分、新宿・池袋から15分のまさに都心のここで、週刊誌一冊分の地価が一万円以上もするこの地で、机に本を広げられる贅沢を考えてみなさいとっております。するとすぐに学生は、「先生、でもネットで見れますよ。」と、今はやりのラ抜きことばで反論してきます。でも、ネットは(わたくしも利用していますが)いくら速くてもあくまでも点と線なのです。書庫に入って、目指す書架に辿り着いて、目指す本があった。その時に「隣りにどんな本が並んでいるか？たとえ全然関係ない本でも、(いや関係ないからこそ)それを目の中に入れることができるのはネットでは出来ない財産なんだよ。」とっております。

本日午後から本駒込の東洋文庫見学が予定されていますが、この東洋文庫の基となるオーストラリア人のアーネスト・モリソンがロンドン・タイムズのペキン駐在記者をしていて東洋研究の書籍を収集したのが明治28年から29年そして整理したのが明治33年というのです。(日本が三菱財閥の資金を得て、アメリカ他、各国とくに中国自体との競争のなかで35,000ポンドで東洋文庫を作り、購入したのは大正8年ですが)ですから円了先生の東洋図書館構想とまさに時期がぴったり一致することをこの度、年表をひっくり返して知り、びっくりしました。円了先生のアンテナはまさに世界の東洋学の第一線の動きと正確に捉えて、じつに明確な反応を手早く行っていたのです。

書架に並べられている何の変哲もない一冊の本であっても、歴史を背負っています。それを取り巻く長い歴史の重みと裾野の広が

り、そして日本仏教近代化の大きなうねりと、その真っ只中に努力しながら味わったに相違ない当事者の苦悩について、まさに本日の皆さまには「釈迦の説法」でしたが、お話しさせていただきました。

御静聴を感謝申し上げます。